

# 日本における青年の自殺

神 戸 忠 夫

昭和30年頃に比し、現在では日本の青年の自殺率がかなり低くなったと云われているが、第1表で明らかのようにいぜんとして問題にする必要がある状態である。15～19歳、20～24歳の年齢階級における自殺率はやはりかなり高く、どちらの年齢階級においても死因の第2位を占めている。この表はまた年齢別自殺率曲線において青年層でのこぶがいぜんとして消えていないことをも示唆している。

第1表 年齢階級別・特定死因別死亡率

(人口10万人対)

区 分	総 数 (死亡率)	不慮の事故	自 殺	悪性新生物	心 疾 患	全 結 核	
10   14 歳	昭 和 3 5 年	50.3	13.0	0.6	4.4	4.0	1.8
	昭 和 4 0 年	39.4	11.3	0.5	4.6	2.2	0.6
	昭 和 4 5 年	33.8	10.0	0.7	4.3	1.5	0.2
15   19 歳	昭 和 3 5 年	105.6	28.2	23.8	5.6	7.3	4.7
	昭 和 4 0 年	68.0	24.4	7.4	6.2	3.3	1.1
	昭 和 4 5 年	76.1	34.7	7.7	6.3	3.0	0.4
20   24 歳	昭 和 3 5 年	174.8	42.0	51.3	7.2	10.0	12.3
	昭 和 4 0 年	114.7	37.3	20.8	8.3	6.6	3.6
	昭 和 4 5 年	96.8	35.4	17.2	7.9	4.8	1.1

厚生省統計調査部「人口動態統計」

日本の青年の自殺率が何故このように高いかについては、従来随分問題となり、社会構造、価値の変化、経済的状況、精神構造などあらゆる側面から研究が行なわれてきた。現在われわれも「日本人の自殺」、「日本の自殺」など数多くの研究成果を手にすることができる。しかし青年層の自殺率が高い原因については、いまだに確たる結論を得ていないのが実状である。

われわれは再度、自殺について環境的側面と心理的側面を同時に考察しながら、自殺をその直接的状況において捉えようとする努力と、更に自殺をする者は日本の青年の中で異質の精神構造をもった特定のグループであるという観点を強く出さないで、日本の社会構造の特

徴を考察しなおし、その中で培われる日本人の精神構造そのものに自殺にむかいやすい傾向が内在しているという観点から研究をしながらみる必要がある。そうでなければ、自殺率に多少の変動があるものの、社会状態の如何に拘らず、とにかく日本の青年層の自殺率が高いことを説明することができなくなるからである。W. Caudill, G. A. De Vos, M. Iga など海外の文献はすべてその点に着目しているし、最近の日本の諸研究も漸次その方向にむかいつつあるとあってよいであろう。

本論文においては、日本の青年層の自殺をその直接的状況において説明するため、どのようなタイプの個人が、どんなふうに、どのような社会的条件・家庭状況を認識し、その結果どのような行為がなされるかということに関する知識を得る努力の方向で、自殺の心理的過程を解明してみたい。勿論まだ十分なものにはなっていないが、日本の青年の自殺にはある独特のタイプがあることを指摘してみたい。また、日本人の自殺型青年と一般青年との間に精神構造の類似が認められ、環境条件特に家庭における父子関係の悪化や社会状況の悪化によって一般青年の側から自殺が増大し、日本の青年層の高い自殺率の原因となっていることが考えられると提案してみたい。

#### 自殺 特に青年の自殺について

自殺を企図し、決行するに到るまでの心理的過程については数多くの説明があるが、M. Iga (3)は、「自殺を起こす一種の認識は、K. Horney が根源的不安とよんだものであると思われる——それは、頼りにならないし、不公平で無慈悲だと認識される外界に対する反応としての緩慢な恐怖である。不安を抱く個人が、社会をこのようなふうに理解したならば、依存と自己誇示が、困難な状況に対処するにあたって優勢となる。状況が好転しない時に、依存と自己誇示の願望との衝突が『完全主義への神経症的な傾向』を通じて強まり、さらに高まった不安が結果として生じる。

依存と自己誇示を求める相互刺激的願望間の衝突が、不安のために強まると、その結果は、自己誇張となるか、もしくは十分な根拠のない資質や業績を、自己や他人に対して表示したいという願いとなる。自己誇張の当然の結果は、自分自身を他人に押しつけたいという願いである。自己誇張の対象が、報復の恐れ、愛の喪失への恐れその他の理由から手に入れられなかった時に、嫌悪——具体化された憤り——が他に対するよりも自分自身に対してむけられる。」(自殺の病理——自己破壊行動——上巻より引用)と記述している。かって園原(4)が「主観的窮地」とよんだ自殺者の心理的過程を、かなり正確に解明しているといつてよい。

しかし Iga の説明に関しては、日本の青年の自殺を対象とする以上もう少し補足する必要があると思われる。依存と自己誇示の中に既に対人葛藤がくみこまれているようであるが、日本の青年の場合、両親との関係や、内集団での人間関係の中で対人葛藤は極度に増幅され、実際の自殺の動機としては、自己嫌悪というよりも、むしろ復讐といったものが大きな位置

を占めていることをもっととりあげるべきであろう。

強い自己嫌悪があると同時にそれを正確に認めようとせず、そのようになった真の責任を自分に負わせないで、自分をこのような状態におとこんだ人の責任や現在自分にこのような苦悩を我慢させている人の責任を、衆人に対して何とかわからせようという、いわば「さしちがえてでも、あいつを悪者にしないでおくものか」といった心理が働くことをもっと重視すべきである。

他人を困らせる、他人の面目を失墜させるという「しっぺがえし」の最も有効な手段として自殺を使う傾向が日本の青年には多いということになる。自分を正当化し、自己の道徳的正当性を主張して、その正しさをわかってほしいという願望、自己の正しさを主張し、鮮明にするためにはもはや自殺しかないという思いこみなどが何回も執拗に繰返され、結晶作用をおこす形で成立する。後は冷たい仕打をうけた、無視されたといった日常生活でありふれた現象をひきがねとして、衝動的に自己の死を衆人の眼にさらす状態となる。

この際、特定の個人（日本では幼児期から真の父子関係が成立していないためか、よく社会的地位のある父親がその対象として選ばれる）に対する抑圧された憎しみを次第に増幅すると共に、「死」を観念的なレベルで捉え、具体的な「死ぬこと」へのおそれはあるものの、美化された死後の状態を強くうきばりにしており死の恐怖を意識の片隅に押しやってしまう。勿論「親にすまない」といった気持も共在し、愛憎二つの気持の間で振り反応をしているかのような動揺を続けるのである。

いわば依存の気持、保護・拘束に対する嫌悪、愛着と自己誇張、受容・承認の要求、憎悪が複雑にからみあった「他罰の要求」を実現するといった自殺の型が、日本の青年に案外多いといえるのである。

自殺はたしかに逃避であり、上述の心理過程も弱者の論理、逃避であることにはかわりがないが、日本の青年の場合には緊張解消のための積極的手段として自殺を使う場合があると指摘してよいであろう。この意味では日本の青年の場合、すべての自殺を単なる逃避の枠内で論ずるのは問題の本質を見失うおそれがあるといっても過言ではない。従来の自殺の研究は「死」が存在するが故に、あまりにも敗北、落後、逃避の観点から照明をあてすぎるきらいがあった。少なくとも自殺者本人にとっては、自殺が非常に積極的な意味をもった訴えの手段である点をよく考察しておく必要があるといえよう。

上述の心理過程に関しては、笠原(1)の記述する自殺未遂者の具体像がその一端を明らかにしてくれよう。笠原は自殺未遂者が医療に対して示す態度を二つに分類しているが、その第二の類型とされている型「医療に対して著しく矛盾した態度をみせ、医療の側に不断の緊張と不安を喚起してやまない人々」がこれにあたるといってもよからう。と同時に笠原はこの型の人々がかなり多数存在しているということも指摘しているのである。

具体的に云えば「自分が病的であるという病識乃至は病感を持ち、そのために援助を懇願

しながら、それでいて医療者の態度に甚だ敏感で、些細なきっかけから容易に攻撃的となり、治療を放棄しようとし、入院中においてもしばしば再企図を行なう人々や、表面的には反目をあらわにするわけではないが、治療関係の中に容易に入ってこず、医師や家族の努力にも拘らず、すぐさま治療から離脱しようとしたり、次々と医師をかえようとしたりする人々である。要するに他者への期待の強い葛藤の多い人々で、治療中も不平不満が多く、直接間接に反目を示し、再企図の危険を自ら予知することによって、医療者に不断の緊張を余儀なくさせる型である。」（「日本人の自殺」より引用）

すべての日本の青年の自殺が、この神経症的な「他罰」的タイプのものであると極言するつもりはないが、老人の場合とは異なり、日本の青年においては案外この種の動機、原因が自殺率を高めているとあってよいであろう。

#### 日本における自殺型青年の人格像

前項でも少し触れたく、自殺を指向する青年は、その人格の深層部分に特徴のある原初的根拠構造を形成しているものと考えられる。

第2表に示す如く少なくとも依存性、卑下・劣等感、過敏性と自己不全感ないし不安定性、主観的傾向と根拠のない自己誇示性の4つの基本的人格特徴を全部かね備えているとあってよい。しかも前の2つの人格特徴は、あまり強く抑圧されずむしろ表出的人格像として表面に出る傾向があり、後の2つの人格特徴は強く抑圧されて日常生活では異常とを感じるまで表出されることがあまりないといってよい。しかし実際のところ表裏一体の関係にあり、場面に応じ抑圧された特徴も強く表出される可能性を有している。

これが日常生活場面でどのような生活態度、行動様式としてあらわれてくるかはそれぞれ中間的領域、周回的領域として示した。これから容易に想像しうるように自殺型青少年のおもてむきは、謙虚で人あたりのやわらかい、細心綿密に他人のことに気を配る親切な行動傾向をもっているといえる。しかしその反面、非常に傷つきやすく、しかも頑固、強情で主観的な傾向をもち、ひっこみ思案でありながら指図、命令をしたがる専制的、権威主義的傾向を示すといってよい。この表裏の間のへだたりが大きければ大きい程、人格の統一がなく、しっかりした行動基準もないということで到底自己保証はできず、神経症および自殺への距離がちぢまることになるといってよいであろう。

いずれにせよ一つ一つの人格特徴が独立で、或いは相互に強勢しあって適応の失敗、周囲との異和感、敗北感などをもたらす、遂には自殺への道を歩ませることになるわけである。この中の他罰性について再度言及すると、自殺決行へのひきがね的働きもするということがその役割に注目しておきたい。

第2表で中間的領域、周回的領域の生活態度、行動様式までも列挙したのは、自殺の解明に対し従来から定量的研究が非常に少ないことを考え、今後自殺を定量的に研究するための

日本における青年の自殺

第2表 日本における自殺型青年の人格像

	あまり強く抑圧されない特徴		強く抑圧される特徴	
原初的の根本構造	孤独感 依存 甘え	卑下・劣等感 自罰 無能力感	不安定性・過敏性 逃避・攻撃 自己不全感・意志薄弱	自己誇張 他罰 主観的傾向・尊大
中間的領域	親への愛着と反撥 友人・イングループとの愛着的関係の樹立と保持の要求 自我喪失	マゾヒズム的思考 自己憐憫と被害意識 反動形成 罪悪感 自己抹消	自閉的傾向・自閉的世界の確立 中核的自我の未成立 受動性 ペシミズム 自我の不統一 あらゆる可能性の保持の要求	自己の道徳的正当性の強調 他者への感情投射 憎悪対象の設定と結晶作用 異質のものへの不寛容 自己抑制の欠如
周辺の領域	対人関係に対する強い関心 過度の気くばり 過度の親切 親・友人・イングループからの受容、共感、支持、保証の獲得	他者や集団に対する過度の忠誠 過度のはずかしがり 過度の遠慮 自己主張の欠如 中心的地位へのしりごみ	高い要求水準と完全主義 過度の自他比較 主観的な他者像、社会像の作成 易感性・きずつきやすいくこと	視野狭小性 権威主義的言動 中心的地位への指向 感情の易発性・易変性 強い固執傾向
生の形式	迎合	献身	自己充足	業績・特性の誇示

仮説的モデルを作成しようと思ったからである。まだ今後内容を訂正変更していく必要があるものの、質問紙その他の方法で自殺の希求度を調査したり、自殺者の精神構造、自殺の原因などを探る時に定量的に測定を行なう基本構図にしておきたい。

個々の特徴の重みづけができ、相互に関連づけられた総合人格像が数量的に確かめられれば理想的であるが、現在のところ、自殺者において抑圧される傾向にあるものとむしろ表面に出やすいものとの関係しかわかっていないと結論しておくより仕方がない。

最後に再び自殺型青年の人格像が決して特異なものではなく、日本の一般青年においても数多くみられる人格像であることに注目したい。再び Iga の指摘を引用すると、「日本青年が自らを社会対象に関与させていく基本的様式は、次のようなもので特徴づけられる。すなわち(1)依存、同一性 (identity) の欠如及び他者の反応に対する強い関心、(2)自己誇張のナルシズム的願望、(3)不安定性、根深いペシミズム、(4)罪悪観、恥辱および困惑しやすいことなどで示されるマゾヒズム。」(自殺の病理——自己破壊行動——上巻より引用)となり、第2表にかかげた自殺型青年の人格像と一致する点が多い。

その他「名声を熱望するのは、日本青年に共通している。」「日本青年の楽天主義と自己過信は十分に確定した事実である。」「日本人の自己過信は願望的な思考、人が望むものは必ず真実でなければならないという幻想に……つまり、大人になったら手に入れると思われる力や、到達すると思われるものとは全く違う状況を思考することに向かっている。」(J. Stoetzel) とか「日本人は優秀性の基準という先入観を不当にもっている。……彼らは自分が他人にとってどのように見えるかを気にかけ、ときには、あまり顕著ではないが、自分が自分自身にどう見えるかを気にかける。」(G.A. De Vos) 等の言葉も日本の青年の人格特徴をかなり正確にとらえた言葉であり、日本の青年が自殺に接近しやすいことを示唆している。

更に Iga の指摘を続けると「多くの日本青年は、自分自身の問題を解決する能力が自分にあるという確信を欠いている。そのことは責任を回避しようとする傾向と共に、依存と集団への加入を強く望むことで象徴される。日本青年は『自分は共同体の生活の中に参加せねばならないと感じている』にも拘らず、『同時に自分はその仕事に従事するのに向いていないと感じ』、またどのようにして共同体に参加するのかという点について『詳しいことをたずねられると、その問題を避けようとする』傾向がある」と述べている。

これらの日本青年の特徴は、日常の社会生活場面で実によくみられるものであり、甘え（不完全な自分をそのままで完全なものであるとして暖かく受け入れ、つつんでほしいという願望や依存への願望）と共に自殺型青年の精神構造に類似するものである。このように見えてくると日本の青年の自殺率が高い現象は決して偶然のことではなく、青年期になって社会参加をきつく要請され、家庭でも突然訓練なしに一人前の行動が要求されるようになる日本人全体に通ずる精神構造のなせるわざであると結論をせざるをえない。このあと自殺にむかうかどうかをきめるものは、自分の誇りを傷つけずに甘えを許し支持してくれる両親（特に父親）が居るかどうかが、また自分が期待する通りの扱いを両親がするかどうかが問題であろう。いわば父子間の人間関係が崩壊するかしないかがそのわかれ道になるといってよい。ここまで論ずれば当然日本人独特の精神構造とその形成過程、日本の社会構造の特徴などを論じなければならなくなるが日本人の精神構造その他についての考察は機会をみて後に論ずることにした。

#### 引用ならびに参考文献

1. 高坂正顕・臼井二尚編：日本人の自殺 創文社 昭和41年
2. 大原健士郎：日本の自殺 誠信書房 昭和40年
3. E. S. シュナイドマン編 大原健士郎他訳：自殺の病理 ——自己破壊行動—— 上, 下巻 岩崎学術出版社 昭和47年 (M. Iga: 日本人青年層の自殺と社会構造は同書の第11章)
4. 園原太郎：自殺の心理 創芸社 昭和30年
5. 総理府青少年対策本部編：昭和46年版青少年白書

(1972.7.31 受理)